

クリスチャンとして、医療人として

プロフィール

ひでたん (スタンフォード大学ポスドクフェロー)

医科大学卒業の後、5年間の臨床研修(小児科、新生児科、麻酔科、救急科)にて小児科専門医、大学院医学系研究科にて博士号所得。

2007年から博士研究員としてスタンフォード大学神経科学部門において新生児脳傷害の研究に従事、現在に至る。

日本では吹田聖書福音教会(大阪府吹田市)に在籍。現在は Peninsula Bible Church (Palo Alto)の会員として同教会で日本語バイブルスタディの奉仕を3年間継続。

2010年より EMF (Evangelical Medical Fellowship: 福音主義医療関係者協議会) 幹事、運営委員。

メールアドレス hide-tan@rg7.so-net.ne.jp

キリストとの出会い

私の両親はプロテスタントの教会に通うクリスチャンでした。幼い頃から教会学校でキリストの話を知っていましたが、自分から神様に従いたいという気持ちはあまりなく、小学校で野球をはじめたために(日曜日に練習や試合があるので)教会に通うのはやめました。そして両親も事情があって教会に通わなくなっていました。そんな中、わたしは自分勝手に普通の男子小中学生として過ごしていました。下町でしたので、授業を妨害したり、学校でたばこを吸ってみて親が呼び出されたりする「普通の」小中学生でした。

中学3年生のころ、ある友達とたびたびめ事がありました。そして、中学卒業のときにどうしてもゆるせないことがあり、その友人を殺してしまいたいと真剣に考えました。いろいろ方法を考えていたところ母が英会話に通っていた教会から高校生の聖書合宿に誘われました。幼い頃の記憶では教会といえば同年代の子と遊ぶところと思っていたので、私はむしゃくしゃしていましたし、女の子とでもあって気を紛らわそうくらいの気持ちで参加しました。

そこで牧師のメッセージがあり、このように語られました。

“ここにあなたを連れて来たのは神である。

あなたには憎んでいる人がいるはずだ。神があなたをゆるして下さるのだからあなたも

その人をゆるし、その人の祝福を祈りなさい。”

このメッセージを聞いたときに、“神は私のことを知っておられる”と思いました。非常な恐れとともに神を受け入れ、キリストの十字架を感謝する祈りをしました。その合宿で私は女の子と出会うどころかキリストに出会い帰ってきました。そして帰宅して次の日、新しい心で新聞を開くと同級生を殺した高校生の記事が載っていました。しかもその手口が私がまさにやろうとしていた方法だったのです。自分はもしかしたらこの新聞に載っていたのかもしれない、しかし神は寸でのところで私を止めてキリストに出会わせてくださったのだと思いました。

医師を志す

VIP San Francisco (2011.3.4)

その後すぐに高校生のときに一年間はピッツバーグにいました。父が外科医で肝臓移植の勉強をしにいくためです。そこで自分はアルバイトをしたかったのですが、ビザの関係でできなかったのので盲学校でボランティアをしました。それで、ボランティアっていいなと思い、日本に帰ってからもすることにしました。夏休みに脳性麻痺や精神遅滞の子どもたちがいる施設にボランティアに行き、「ああ、社会にはたくさん問題があるんだなあ。でも、これらの問題全てを解決することなんて自分にはできないなあ・・・でも、ひとつくらいは出来るんじゃないか。人生をかければひとつくらいは。」と思ったのです。それからネパールで医療協力をしていた医師、岩村昇さんが書いた本をきっかけに医者になろうと決めました。

医者になるのを決めたのはいいのですが、何科の医者になるかも問題でした。私にわかっていたのは、『人に仕えることで神に仕えたい』ということです。それで、どんな人に仕えたいのかを考えて臨床実習にのぞきました。医学生として病院にいるときに「いったいこの病院でもっともエラいのは誰だろう？」と思いました。そんなことを考えているときに小児科の臨床実習で教授が赤ちゃんの診察をしているときにその赤ちゃんがピューっとおしっこをしたんです。教授のネクタイはおしっこで濡れたのでお母さんがすごく慌てて「ああ、教授先生、すみません。すみません。」とオロオロしていました。でもその教授はネクタイを外して「いやいや。俺が悪いや。赤ちゃんを診察するのにこんなもんしてるからや。」と言ったのです。”かっこいい！この教授みたいになりたい。こういう人こそスゴい！”と思ったのですが”ちょっと待てよ。エラいのは、教授におしっこをかけて謝りもせずに寝ているこの赤ちゃんや。この子は謝りもしないし、ありがとうも言わない。エラそうにしてる。このようにエラい赤ちゃんに仕える医者になろう！”と考え直して小児科医になることにしました。そもそも人に仕えるのは身を低くすべきなのに医者になると高慢になってしまいます。でも「ありがとう」も言ってくれない赤ちゃんや子どもたちの前では膝をかがめて仕えることができます。

私が目指すのは「仕える医療」です。・・・子どもは手がかかるからこそ、そして最も弱い立場にあるからこそ、この子どもたちのために人生を捧げたいと思うようになりました。・・・(中略)・・・かねてから世界的視野に立った医師になりたいという思いがあります。将来は留学や国際学会などに積極的にチャレンジし、世界の医師と協力しあい、世界的なレベルにおいても小児医学に貢献できるような働きをしたいと願っております。(1996年10月、医学部6年：小児科入局志望動機)

信仰的潜水艦生活

信仰的潜水艦生活とは、特に就職したての若いクリスチャンが、就職や転職を機に多忙を極め、それまで通っていた教会の礼拝などから離れがちになり、クリスチャンの友人との関係、ひいては神との関係が疎遠になってしまうことを言います。この現象は特に医療関係に就職したクリスチャンに多く、昔から問題になっていたことですが、自分の潜水艦生活を振り返ると研修医の時代がわたしにとっての潜水艦時代でした。

原因や予防など考えられることはたくさんありますが、私が研修医になるまえに自分の考えとしてしっかり身につけておくべきだったことは次の三点だったように思います。

- 1：神は本当の神であり、天地万物を創造した全知全能の神である。自分が自分の人生の神であるかのようにふるまい神を自己実現のために利用してはならない。
- 2：聖書に書かれていることは真実である。イエスキリストの生涯も、十字架も、復活も、神話や伝説ではなく、本当に起きた事実である。だから、神が私たちの為に身代わりとなって下さった無限大の愛も単なる物語ではなく、真実 (True) であり本物 (Real) である。
- 3：神はあなたに弱いあなたに失望したり、怒ったり、愛想を尽かしたりすることがない。神様との関係が疎遠になったからといって自分を裁いたりせず、安心して神に祈ればよい。

研究をするようになったきっかけ

もともと研究をしたいという思いはありました。臨床でどのように頑張っても、治せない病気を次のレベルの医療で迎え撃つにはどうしても基礎研究をする必要があると思っていたのです。そして新生児集中治療室で働いていたときに多くの赤ちゃんが難産の末に、脳に後遺症を残したりするケースを見たので、新生児の脳傷害について研究したいと思うようになったのです。わたしは、「なにかひとつ問題を解決できれば」と思っていました、奇しくも科学という手段を通してそれを成し遂げようとしているのだと今、あらためて思います。

私は「手技的に簡単で副作用が少なく、しかも高くつかない。それでいて未熟児の予後を著明に改善させるような治療法」を研究したい・・・(中略)・・・私たち小児科医は過去に目の目を見ることになかった多くの小さいのちに対する責任を果たす意味でもさらに良質な新生児医療を追求する必要があります。

(2001年11月、医師5年目：大学院入学を希望するに際して)

スタンフォードに導かれた経緯

私が全体の会議を通じて・・・感じたことは、「このように一部の西欧諸国の経験をもとに世界の新生児医療の基準や方向性を決められてしまっても良いものだろうか？」という疑問です。やはり日本からも Hot Topics をもっと発信すべきだということです。・・・(中略)・・・日本はオピニオンリーダーの一角として発言し、世界の新生児医療(医学)の発展に寄与すべき・・・国際会議に参加し、このような意識をもつことで一人の赤ちゃんに対する診療や、一つの研究データが世界に開かれているということを再確認することができました。(2005年3月：国際学会に参加して)

VIP San Francisco (2011.3.4)

それは、私がアメリカで学会をしていたときに今のボスと出会ったからです。同じ研究分野の人だったのでよく知っていたのですが、彼女は私がトイレに行ってる時に私のポスターを見に来てくれていました。遠くから彼女を発見して「あーDr. A！ 光栄です。いつも論文を読んでいます！」と駆け寄りました。たぶん、彼女は私のそのような言葉を気に入ったのでしょう、それと一緒に働くことになりました。・・・いや、たぶん、プレゼンも気に入ったのだと思います。現在のボスと出会ったのは大学院生のころでしたが、数ヶ月後に二つの論文がアメリカの学術雑誌に掲載され、それをもって正式にインタビューを受けてポスドクとして2007年から現在に至るまで新生児の脳傷害について研究しています。

日本語バイブルスタディについて

これからのこと（研究者としての祈り）

クリスチャンとして、医療人として

クリスチャンとして信仰を持ち続けること、少なくとも神への信仰を生活の最優先事項にしてしまうことが、なにかのプロフェッショナルとしてのキャリアを積む上で障害になるのでは？と思うことってないでしょうか？

今日は、そんなことを考えているうちに導かれた聖書箇所があるので、ちょっといろいろ考察してみたいと思います。

～さて、彼らが旅を続けているうち、イエスがある村に入られると、マルタという女が喜んで家にお迎えした。彼女にマリヤという妹がいたが、主の足もとにすわって、みことばに聞き入っていた。ところが、マルタは、いろいろともてなしのために気が落ち着かず、みもとに来て言った。「主よ。妹が私だけにおもてなしをさせているのを、何ともお思いにならないのでしょうか。私の手伝いをするように、妹におっしゃってください。」主は答えて言われた。「マルタ、マルタ。あなたは、いろいろなことを心配して、気を使っています。しかし、どうしても必要なことはわずかです。いや、一つだけです。マリヤはその良いほうを選んだのです。彼女からそれを取り上げてはいけません。」～（ルカの福音書 10：38-42 新改訳）

医療人としてここを読む時に、なにかジレンマのようなものを、私は感じます。でもそのジレンマはどういう心から生じるのでしょうか？

「そんなこと言っても、聖書読んだり祈ったり、礼拝や交わりに参加しても手技は身に付かないし、知識も増えへんやん。」

これは、本当にもっともらしいです。今は私は研究ばかりの生活ですが、それでも、

「いくら神様でも、僕が研究しているような刺激を与えれば細胞に発現したり分泌したりする物質がどうふるまうかとか、どういう手法が疾患のメカニズムの解明に役立つかまではわからんやろ。やはり鬼のように実験しまくらないと・・・」と思うこともないことはないです。

VIP San Francisco (2011.3.4)

でも、本当にそうでしょうか？

たしかに、挿管の仕方やCVカテの入れかた、全身管理のノウハウなどを直接教えてくれることはありません。

研究でも、ここはどの分子に注目して、どの抗体やプライマーを使ってやればいいのか教えてはくれません。

ハイレベルなディスカッションになったときにイヤフォンから「こう答えなさい」という指示もくれません。

だからといって、私たちが働けるように身体を維持して下さり、患者さんや同僚との関係を築いていく手助けをしてくださり、様々な人々との出会いや職場環境をコーディネートしてくださっている神様との語らいや交わりを後回しにしてよいはずはないと思います。

ここで、イエス様は「どうしても必要なことは一つだけ」と言っておられます。

それは、「神とともに歩む」ということだと思えます。

私は研修医一年目のころ、どうしても手技がうまくならなくて悩んだことがありました。

患者さんや親御さんからの信頼を勝ち得ずに泣いたこともありました。

でも、そのときに気づいたのは「自分が立派になること」にばかり集中している自分でした。

神とともに歩むことを忘れていたのです。そして、神とともに歩むということは、どこまでも勤勉になり、どこまでもへりくだり、見返りや人の目を気にせずに与えられたことがらを忠実にこなすことにつながってくるのです。それに気がついたことが私にとっては大きな転機でした。

自分が立派な医療人となるために・・・というだけなら、たとえクリスチャンであっても神様の助けを確信できません。

でも、患者さんの苦痛を取り除くために・・・という気持ちが心をしめているなら、神様の助けを確信してゆだねて歩んで行くことができます。

自分を磨いて、自分の力で医療を行うのではなく、神の前に人の前にへりくだり、主イエスご自身が自分を通して働いてくださるのを願う医療人でありたいと思うのです。そして、この後者の提供する医療は前者の提供する医療に劣ることなどまったくないと私は実感していますし、多くの先輩方も同意して下さると思います。

自分は度胸がなく、不器用で、しかも鈍いと思っていたし、今もそう思うのですが、患者さんへの説明の前に祈り、外来を始める前に祈り、手技の前に祈り、赤ちゃんの蘇生に立ち会う際にも祈り、することで、そのような自分への不安感から解放されて仕事へ向えます。そして勤務を終えるたびに主に感謝します。そして、主が働いてくださった結果は自分以上に周りの目からも明らかになることが多いのです。

大学院の研究も、本当に遅々たる歩みで、優秀な他の院生たちの中で、肩身の狭い思いをしていました。

VIP San Francisco (2011.3.4)

しかし、神様は不思議な導きで想像以上の論文を仕上げさせてくださり、誰もが認める業績で卒業することができたのです。指導教官から「ふつうなら、研究がうまく進まずに、無理して体調を崩して入院したあの時点でやめている。よくやった。」と言われた時に、主が私を背負って下さっていたのだと思いました。

ここで、とくに若いクリスチャンの皆さんに聞きたいのです。

医療人として、あるいは社会人として、自分を磨くために神を脇に追いやりたいとお思いでしょうか？自分だけでなく他の人々をも窮地に立たせるところまで、神なしでやれるところまでやってみたいとお思いでしょうか？あなたを造り、愛し、ときには背負って下さる栄光の子羊に向い、「主よ。私を偉大な医療人としてください。私に満足感と達成感を味合わせ、患者さんと同僚から尊敬を得られますように！そして、少しはあなたのことも宣伝しておきます。」と祈るでしょうか？

このように祈るかどうかは、個人の自由です。

でも、私はこれからの人生、そのように神を自己実現のために利用するような祈りをしたくありません。神が自分を通してなされたことを、あたかも自分の力でやったかのように振る舞いたくありません。私は、ほふられた子羊イエスの御前にひざまずいて聴診器を神に返し、そのうえで神から再びそれを受け取りたいです。

自分がある職業人（私の場合は医師／研究者）として神に召されたということは、神がこの世でなす業をなしていくことです。

身を低くして人に仕え、勤勉に真摯に仕事に励み、神に栄光をお返しすることです。

そのように歩むなら、神はどんな局面でも私たちとともにいて下さり、どんな祈りにも耳を傾けてくださるはずです。

もし、神をそのような地位に落としていることに気がついて悔い改めるなら「アーメン（そのとおりです）」と心で唱えてください。私も実は神をそのようにしか見ていなかった、でも、これからは口先だけではなく本当に神を主として崇めて歩みます！と祈ってください。

私たちは忙しさという海の奥深くに潜ってしまい、神から心が離れて、光が届かなくなってしまうことがあります。そして上がれなくなってしまうようにさせる重り、それがこのように「高ぶった心」なのです。それを正直に認め、取り除くべきだと私は思います。

～人の歩みは主によって確かにされる。主はその人の道を喜ばれる。その人は倒れてもまっさかさまに倒されはしない。主がその手をささえておられるからだ。（詩篇 37 篇 23-24 節 新改訳）～

神とともに歩む人生とは、このような人生です。もし、そのような人生を歩みたいとお思いでしたら、どうか聖書を開いてみてください。神様に祈ってみてください。

「私はあなたを知らずに歩んできました。しかし、あなたがともに歩んで下さる神であると聞きました。どうか、私とともに歩んで下さい。もっとあなたのことを教えてください。アーメン」